

近代化過程における日中両国の 漢字の改革について

張 榮 湄

5 漢字簡略化の趨勢の展望

日中両国の行った漢字簡略化については色々な意見があるが、この意見は大きく二つに分けられる。

一つは漢字簡略化に主に賛成した上で、ある部分に具体的な意見批判があるものである。例えば、藤堂明保は『漢字の過去と未来』において今後は漢語・漢字の本質に戻って「ことばの仲間」を軸に簡化を進めるべきだと言う意見を述べる時、こんな例を挙げている。中国では「豊」→「丰」に簡略したのは良いアイデアであるが、この後に「逢」→「丰」、「峯」→「丰」、「縫」→「紉」、「鋒」→「針」のように推し広げれば良い。¹⁾ 李栄「漢字の演変と漢字の将来」は、ある歴史の資料によって、「諮」と「咨」と言う字は意味が同じで、あちこちに使われていたが、歴史的には、この「言^{ごんべん}」はなくて、後から付け加えられたものであると述べてから、「日本の常用漢字表に「言^{ごんべん}」を付けた「諮」はあったが、「言^{ごんべん}」を付けない「咨」はなかった。もし、ただ文字と言う角度からだけ言うならば、仮に常用漢字表に「諮」を「咨」に変えたところで意味、用途にはちっとも関係がない。それならば本来の書き方でいいではないかと私は日本の学者に尋ねたい。」²⁾と意見を述べている。

もう一つは漢字簡略化を主に賛成しない意見で、例えば簡略字が伝統文化を伝えにくい³⁾か、歴代の典籍を捨てることであり、伝統文化や文学の業績を捨てることである。⁴⁾ しかし後者の意見がこれまで述べた日中両国の簡略字の歴史と簡略字化の方法（由来の源）の分析から見れば、明らかに成り立たないだろう。現在両国の簡略字のほとんどは新しく造った字ではなく、過去に例のあるものを、そのまま利用するもの、そこから推し広げたものである。日中の簡略字は伝統文化が活用された模範の一つと言えるだろう。

また漢字簡略化は日中両国だけでなされたのではなく、近年になって東南アジア等漢字を使用する他の国と地方でも、漢字簡略化の動きが見えている。

漢字簡略化の趨勢はどうなるのか、漢字簡略化の先行きはどうなるのか、次にこれ等の問題について探求しよう。

A 漢字を使用する他の国と地方の漢字簡略化の実態と動向

中日両国の近代化が進むにつれて、漢字簡略化は漢字を使用する他の国と地区でもある程度進められるようになって来た。

中国の漢字簡略化に賛成しない声が強い台湾でも、1954年に簡略化運動が起こり、「70年代始め頃の漢字の標準化の中で、常用字4808字を決め、標準字体を選ぶ原則として、「六書」に外れない条件をつけながら書きやすい俗字も取り入れる。」⁵⁾ ようになった。また「1974年国民党第十回中央委員会第5次会議で「中国文字の整理と簡化に関する提案」も通過した。」⁶⁾

香港では、一般に中国の広州方言を使っているが、最近普通語を話す活動が盛んで「普通語通迅」の雑誌も出版された。⁷⁾ 漢語の出版物は全て繁体字を使っているが、最近になって将来を考え簡略字の使用が提唱されている。⁸⁾

シンガポールでは1969年「簡体字表」(502字)を公表してから政府、民間とも試用することになった。それには、シンガポール独特の11字の簡略字が入っていた。1974年いわゆる2248字の「簡体字総表」と称される字表が公布された。これには上記のシンガポール独特の11字が含まれており、中国簡体字と異なる37字のシンガポール簡略字を逐一カッコに入れて過渡的に使用するものとした。実際の漢字は2287字となる。ここでも教育実用上の混乱が生じた。この混乱を除くため、1976年「簡体字総表」修訂本は同時に付録として異体字表と「新旧字形対照表」をつけ決着がついた。シンガポール簡略字は2238字となり、中国の簡略字と全く一致することになった。⁹⁾

マレーシアでも1972年簡略化漢字委員会が成立してから、すぐに中国の簡略字を研究、参考しながら、マレーシアの「簡化漢字総表」を研究、編制し始め、1981年2月「簡化漢字総表」を正式発表した。この「簡化漢字総表」は三つの表からなっている。a表は漢字の偏旁簡化表で、中国の1964年の「簡化字総表」の第2表に相当する(ただ「𠂇」と言う一つの字が増加された)。b表は2236の簡略字を収めた。中国の現在の2235簡略字の全てを含んでいた。c表は中国の1955年の「異体字整理表」に相当する(違う所が5箇所ある)。この他に「新旧字形対照表」と「漢語ピン方案」がある。¹⁰⁾ これから見てもマレーシアはほぼ中国の簡略化の成果を採用していることが明らかである。

韓国では漢字改革と言うより、漢字制限の問題が中心となった。政府は1951年「常用一千字漢字表」と1957年「臨時制限一覧表」の1300字を公布して、漢字を性急に廃止または制限しようとしたが、約1500年にわたる漢字使用の歴史をもつ一般社会の漢字使用の要求との矛盾が絶えず発生し、1972年公布した「漢字教育基礎漢字」は1800字になった。字形簡略化は公的にはなされていない。一般に使われている常用字に伝統的俗字があるが、日本の簡略字と共通するものが多く、中国の簡略字と共通するものもある。¹¹⁾

以上から近年、日中両国の他に漢字を使用する国と地方で漢字簡略化が進んでいることが明らかであろう。

B 漢字の特質と簡略化の可能性

漢字に対する悲観的な見方が変化した今日でも、字数の膨大さ、字形の複雑さは漢字の致命的な欠点の二つとして存在している。

漢字は甲骨文から始まり現在通用している楷書に至るまで、少なくとも4500年以上連続して使用

されており、世界文字史上最も長い歴史をもつ文字と言われる。漢字字数は時代を追って増加し、清の時代の康熙字典が載せた漢字数は42,174字で、民国の時（1915年）の『中華大字典』が載せた漢字数は44,908字にのぼった。1960年に日本で出版された『大漢和字典』が載せた漢字数は49,964字である。1986年に中国で出版された『漢字大字典』が載せた漢字数は約 56,000字である。字数の多いのには驚かされる。

字数がたいへん多いので、書面上それを区別するためには、外形の違いに頼るほかはない。従って画数の多い複雑な字も出来る。字数と画数とは切り離せない関係にある。例えば變、鹽、竊、獻、釋、鑄などは全て日中両国の常用字であるが、字画は20画以上で、字の構成は複雑で、これらの漢字を書くのは大変であり初心者ばかりでなく大学生をも悩ませる。

漢字の字数は増加し、字形が繁化されると同時に実用上の理由から簡略化もされて来た。後漢（25～225）の『説文解字』で許慎は「初有隸書、以趨約簡」（初めに隸書があった、後で約簡、簡略に趨向する）と書いた。また「秦朝の小篆こそ大篆の簡体字である。小篆から秦隸に発展したが、秦隸こそ小篆の簡体字である。隸篆から漢隸に発展したが、漢隸こそ隸篆の簡体字である。漢隸から草書や楷書に発展して、これは現在の簡略字に発展した。」¹²⁾ という説がある。

民間も絶えず多くの書きやすい字を作った。特に宋元以来、中国には二字の単語が多くなった。ある研究によれば、『水滸伝』では二字の単語の数は 70%に上った。「漢語の単語の構成形式のこの変化は必然的に漢語を記録する漢字に大きな影響を与えた。書面から見て、元々は単語を表し、あるいは区別する任務（重荷）は上下文を除いて全て字形の結構が担当したが、二字の単語が優位になって多くの単語は二字あるいは二字以上によって記録されるようになったので、一部の任務（単語を表し区別する重荷）は字形の結構から、この単語になる二字あるいは二字以上が分担するようになった。字の重荷（任務）が軽くなって、文字を簡略化する余地が出て来た。」¹³⁾ のである。また宋元の時代、印刷、手工業、商業の発達に伴い、いよいよ漢字が士大夫の独占物であった時代が終わって、庶民の一角に取り入れられるようになった。

宋元の頃に通俗読物が売出されて、これらの作品では多くの書きやすい俗字が使われるようになってきた。先にしばしば引用した『宋元以来俗字譜』は、宋元以来の約 900年間に12種の口語的作品から拾い出した書きやすい俗字を集めたものである。

封建社会の代々の支配者は、これを認めなかったが、それでも簡略字は流行し、しかも大衆から喜ばれただけでなく相当な文人も愛用した。例えば、明朝末清朝初年の大学者、黄宗羲（1610～1695年）がいつも簡略字をつかったそうで、「喜用俗字抄書。可省工夫一半。」（俗字で本を写すのを好んだが、必要な手間を半分はぶく事が出来るからである。）。簡略字は民間で長い歴史をもっており、漢字の筆画が多い常用字の殆どに簡略字がある。簡略字は標準字として認めなくても、実際に実用文字として存在し、流行している。現在日中両国が採用している簡略字は圧倒的多数が既に存在した書きやすい字であると認められるし、この基礎のうえに整備し標準化することである。要するに漢字簡略化は民間に深い基礎があり、漢字の発展の大趨勢である。

また漢字が既に出来た表記方式と言う他の視点から見ても字形の簡略化が可能である。林大氏が

実験によって以下のように述べる。

漢字の字形の識別に有効に働くのは、字によっては部分を離れた全印象であり、また部分的な特徴形であったりして、一々の点画の細かい総計では必ずしもない。読めるが書けない、と言うのがそれを示している。また誤記の例として特徴部分が一部を変えて現れるのもそれである。試みに『漢字（上）』のあるページに掲げられた縦横三センチの明朝体70字のそれぞれの中央に一円硬貨をのせて数人に読ませてみたところ、いくらかの読み直しはあったが殆ど皆が正解した。これが当用漢字全部に及ぼせるとは思われない。「九、丸」の別や国構えの諸字など、中心部が隠れては識別の無理なものが確かにあるが、明朝体形式の特徴をある程度手掛かりにすれば相当多くの字は一円硬貨で隠しても読めるであろう。¹⁴⁾

以上を総括して言えば多くの難しい漢字を簡略化する可能性は十分にある。

C 近代化と漢字簡略化の必要性

字数が多すぎる原因は、漢字の歴史が長く、代々累積し、毎年新しい字が造り出されたからであり、また特権者のものとして長期間封建社会に養われて来たからでもある。漢字は「尊厳を持つことになり、さらに神秘性を持つようになる。」¹⁵⁾

多すぎる字を区別するため字形が複雑になったが、一方「文字が尊厳性を含むとすれば文字を心得た人もそれに連れて尊敬の対象となってくる。尊敬される者が新しくどんどん現れてくるようでは、旧くから尊敬を集めて来た者にとって不利である。」¹⁶⁾ また、この難しい漢字は「十余年の勉強を経ない限り、容易に修得出来るものではない。やっと修得した者が士大夫（知識人）であり、彼ら士大夫はまた力の限り文字を一層難しくしようとする。したがって「雷」を四つ縦横に接合して書いた字（宋朝『集韻』雷の音の意味）や、「龍」を四つ縦横に接合して書いた字（明朝『字彙補』、多言の意）など60画以上もある字も出て来た。もともと難しい漢字は、その上、中国の封建社会で尊敬を受けた者や士大夫がわざわざ難しさを加えて来た。そのため多くの漢字は必要以外の無用の夾雑物が多く添加されている。「重い鎧を着せ、威厳を持たせ、一部の特権階級による一般大衆支配の道具のようである。」¹⁷⁾ 例えば現在の日本の「従」と言う字はaの人の後にbの人が付き従う意味で、当初は「从」と書き表した。ところが、これでは簡明すぎる。そこで「彳」（道を行くこと）を加え、さらに足の下部を加えて「従」と書くようになった。当初の4画から11画へと増えたのである（今中国では従を「从」に簡略した）。また「咨」→「諮」、「医」→「醫」、「守」→「奪」、「时」→「時」、「爱」→「愛」、「扫」→「掃」のような例が少なくない。この点から見て、漢字の難しいのは封建社会と切っても切れない関係がある。

近代化の重要な要素の一つとして、桑原武夫の言葉で言えば、教育における国民義務教育の普及、或いは魯迅の言葉で言えば、文字を大衆に与える（「将文字交給大衆」）と言うことがあるが、これらの難しい文字を全ての大衆に教えるのは不可能である。このような立場からは「漢字御廃止の議」¹⁸⁾、「漢字には博物館に送り込む以外の価値はない」¹⁹⁾などの建白が出るのは当然と言ってよい。

しかし「文字の生活は一日も中断できない。だから漢字の運命は半分はこれに代わるものの発達によって決められる。たとえ漢字を追放することに内定していても、その椅子に座る者がいない以上は、しばらくその職務を續けさせなければならない。こうした様々の問題は必ずしも短い時間で解決されないことも当然であるが、その間とて漢字そのものが安閑として椅子に踏ん反り返っているわけではない。そこに漢字の制限すなわち基本漢字のような試みもあり、字体を簡略にする略字の提案もあり、全てはやはり簡略化と言う線に乗って動いている。」²⁰⁾

近代化において日中両国が漢字簡略化をして来たが、現在漢字を使用する目安時代にある日本は常用漢字が 1,945 字で、漢字ばかり使用している中国でも通用字が 7,000 字で止まり、字数が一定範囲に減少して来た。また、この範囲の中で相当に字形が簡略化された。百年前と比べると今日では両国の漢字は初心者負担を軽くして、一般利用者に便利なものになっているのは確かである。漢字の難しさと文字を大衆に与えようとする近代化の矛盾によって、漢字簡略化は必然である。

D 情報化時代と漢字簡略化

情報化時代と言えばコンピュータやワープロによる言語情報処理の問題がある。コンピュータやワープロの普及にとっても、漢字簡略化が必要である。

字数から見て今日コンピュータによって漢字を処理するコード体系が「すでに、日本、中国、台湾、韓国で別々に用意されており、字数は必ずしも一致していないが、大体 7,000 字以内に止めている。機械処理上には、数万字に上ろうとも不可能ではないが、実際の使用頻度から言って 10,000 字を越える文字を常時処理出来るようなコード体系を用意しておくことは、あまりに無駄が多い。」²¹⁾ コンピュータ系統によって漢字を処理するのにも、漢字の字数が制限されなければならない。

字形から見ると、近年の電子技術による印字装置は、言わば電光ニュースの文字の表現と同じ原理が用いられているが、ここでは一字を表すためにどの程度まで細かく分解するかが、いかに文字らしくかきだされるかに関係するので字形が複雑すぎると印字装置の費用が何倍にもなる。現在もっとも普及しているのは一字を 24×24 点、即ち 576 の点の集合として表す方法で、点数を無限に増やすことは技術的に可能でも費用が問題になる。「例えば光点文字をコンピュータ制御でテレビ画面に電送するメカニクでは横画の多い 50 字ほど（横画の本数を制限するのは電子印字用の字に対する特殊な要求）のために機械の価格が百万も高くなる。機械にも人間にも読める文字が要求されるので、漢字は簡略化を余儀なくさせられる過酷な条件に接触して来た。」²²⁾

ここに明らかなのは、電子印字に対して字形が簡略化されるのも必要である。要するに情報化時代のコンピュータやワープロによる漢字処理でも、字数と字形は簡略化しなければならない。

総括して言えば、漢字簡略化は可能かつ必要である。情報化時代のコンピュータやワープロによる処理が成功し、漢字の長所が次々発見されるとともに、漢字に対する過去の悲観的な見方が変化する今日では字数と字形を簡略化しなければならない。漢字簡略化の流れが逆転する可能性はないであろう。

注

- 1 藤堂明保著『漢字の過去と未来』P102
- 2 李栄「漢字の演変と漢字の将来」『中国語文』1986年第5期P327
- 3 1990.9.25 「中央日報」より
- 4 台湾「中央日報」1993.6.25
- 5 「台湾の標準漢字研究簡介」「文字改革」1982.1
- 6 陳謙臣「漢字・漢字改革と漢字文化圈」『竜谷紀要』第12卷(1991年)第2号
- 7 「文字改革」1983.1P29より
- 8 陳謙臣「漢字・漢字改革と漢字文化圈」『竜谷紀要』第12卷(1991年)第2号
- 9 同上
- 10 「文字改革」1982.3「文字改革」資料より
- 11 陳謙臣「漢字・漢字改革と漢字文化圈」『竜谷紀要』第12卷(1991年)第2号
- 12 杜学知「漢字繁簡二体から比較して長所と短所を見る」1986.1.19の「星島日報」より
- 13 王鳳陽「漢字字形発展の辯正法」『社会科学戦線』1978年第4期P339
- 14 林大の「漢字の問題」『日本語3』岩波書店1977年P131
- 15 魯迅「門外筆談」『魯迅雜文選』上海人民出版社1973.5P129
- 16 同上P130
- 17 島田昌彦著『日本語の再生』桜楓社1984年9月初版
- 18 1866年前島密の建白書
- 19 1918年に錢氏が劉復にあてた手紙
- 20 倉石武四郎著『漢字の運命』(岩波新書 青版93 1952年)
- 21 野村雅昭著『漢字の未来』P222(筑摩書店 1988)
- 22 佐藤敬之輔著『漢字』—文字のデザインシリーズ5・6P15(丸善1973)

6 むすび

漢字簡略化を先ず取り入れた日中両国にとって、どのように漢字簡略化した成功の面を保持、発展し、どのように漢字簡略化した教訓を吸収、改善をして、もっと時代に合わせて、多面的な合理的な漢字を作り出すかは、日中両国の歴史的責任ではないだろうか。私は、これまで日中両国の漢字簡略化の歴史を辿り、比較の視点から両国簡略字の実態と簡略字化方法を考察して来たが、漢字簡略化の趨勢を展望しながら以下のように考えている。

日中両国には各々の言語の特殊性があるので、漢字簡略化を起こす時点、発展の速度と簡略化の重点の置き所、簡略化の程度は同じではないが近代化に応じて漢字を簡略化するのが必要であると言う大趨勢は一致している。また両国が字形を簡略化する方法も大体同じである。即ち両国の簡略字の由来する源は、主に過去にある字を利用して出来たものと、それによって推し広げたものである。つまり、両国の簡略化の対象、簡略化の目的、簡略化についての認識から簡略化方法まで大体

一致している。

しかし、日中両国が別々に字形を簡略化して来た結果、元々同じ字形の字が簡略化してから不同形な字になる例が相当の数出来て簡略化の発展につれ、両国の字形の違いが深刻になったのも事実である。私はこれについて、非常に残念な気持ちを抱いて来た。私と同じ残念な気持ちをもっている陳謙臣は以下のように述べる。不同形の簡略字が「個人的に使用されるのであれば問題はないが、正式文字として政府の力で広めるとなると、将来非常に不便が起きる。」また一部の旧字を改造した簡略字が出ると、総字数が増加する。字形を簡略化するために膨大な字数の漢字の上に、さらに軽率的に字数を増加するのも適当ではないと思う。人為的に漢字の共通性を崩した結果として、総字数を増加するのは簡略化の元々の主旨に背を向けるのではないか。

この問を解決するには日中両国が共同で字形の簡略化を図り、特に不同形の簡略字について探求すべきである。実際にこれまで日中両国の多くの有識者が日中両国の漢字の簡略化についての共同研究を提案して来た。例えば、1957（昭和32）年、当時中国の総理周恩来は日中で漢字の簡略字を共通にすることを提案したことがある。¹⁾ また、1964年藤堂明保先生は当時の国語審議会に頼まれて、北京で両者の簡略字の調整を試みたが、当時の日米の「中国封じ込め」政策が災いして、肝腎の時期に日本と中国の交流が閉ざされていたので、実現しなかった。²⁾

歴史から見て日中両国の漢字簡略化については基本点で一致するところが多いが、色々な歴史上の原因で、両国で漢字の簡略字を共通化することは実現されなかった。しかし現在では日中の交流は以前よりもっと活発化しており、漢字についての様々な新発見も出て来ている。両国とも字形簡略化が定着した今日では、日中で漢字簡略化について共同研究を具体的に進めるいいチャンスであろう。

勿論、両国が歴史の事情や各字の言語の特殊性を持っているが、これこそ異なる視点で探求し共同的に簡略化すれば、多面的で合理的な同形な簡略字が出来る可能性も高まって行く。また字数が6万に近い膨大な漢字体系と形音義（字形・字音・字義）の三要素を巧みに構築した複雑な漢字に対して、出来るだけ多くの人の知恵と力を集めて簡略化することは有利ではないかと思う。もし、これが成功すれば、両国だけでなく漢字を使用する他の国と地区にとっても、これからの漢字の簡略化と整備に対して価値が高い参考材料になろう。

以下では両国が共同して漢字簡略化に取り組む場合についての具体的意見をのべる。

簡略化の方法から見れば両国の間で最も不同形字が出やすい方法は、旧字を部分的に改造する時に、符号的な形で置き換える場合である。なぜなら、符号的な形で置き換えるものの実質は部分的には人造新字だからである。元々一つの字に対して両国が別々に新しい符号を造って置き換えれば、必ず二つの不同形字が出来る。字形を簡略化することによって混乱しやすい字が増加されるのは簡略化の総効果にとって得るところより失う方が多いだろう。

符号的な形で置き換える場合と言えは最も問題になるのは音声基調による同音的符号で置き換える場合である。中国ではこの方法によって相当数の簡略字が出来て来た。日本では、この簡略化方法を用いられないとは言えない。例えば「浜」「圀」のような例が僅かだがある。両国において

は、この簡略化方法によって出来た同形的な簡略字が一つもない。

今日の研究成果から漢字には他のいずれの文字にもない優れた点として時間と空間を乗り越えられる事が明らかとなった。即ち数千年を経ても意味が通じるし、方言地域や日本等がいこくにも通用する。これは、主に漢字の形によって意味を表すと言うシステムを通してである。日中両国の間では字音が違うから、音声基調による同音の符号で置き換える簡略字形も必ず違うし、中国においても共通語と方言地域の字音も矛盾している。「同音」といえば、ただ或る地方と或る時点のものであるに過ぎない。同音的な符号で置き換える簡略字の音声効果には大きい限界がある。勿論、漢字発展の歴史においては音声基調による方法によって、沢山の新字を作り出したが、現在の段階での主な矛盾は字形が複雑で字数が多すぎる事であるから漢字の簡略化において新しい字を造る方法は避ける方がよい。簡略化は漢字の短所を出来る限り少なくする一つの現実の方策であるから、今の認識水準からみて音声基調による方法を避ける方がよい。字形を簡略化する時には狭い範囲や一時的効果しかない簡略字を避けて漢字の優れたところを保つ方がいいと思う。

注

- 1 斯文会編1977（昭和52）年発行『日本漢学年表』P 499より
- 2 藤堂明保著『漢字の過去と未来』岩波新書（黄版）205, P100 より

付録

簡略字整理表<1>

蚤恋变湾径茎経輕随髓墮属囑覺学繼断参惨辞乱担胆数楼触独励万会絵隱穩区欧殴驅枢塤瓶研併
 寿鏑峽狹狹壯装獎状将寢静褻痴灯来尽濕叙昼国条虚与庁写旧台号潜届醫双余体点党窃对当虫宝
 处麦蚤妒献画礼称声並証岳譽駅积沢沢沢勸飲觀權満両齒齡癆癆惱惱棧残浅踐銭蚩采營勞查濟剂
 齋壳統読広拡鉦滝竜欄黒黙墨層僧贈増憎每海悔梅繁敏侮単禪彈戰敵巢獸俟劍險検験謁喝渴掲掲
 壤嬢讓釀粹碎碎雜稻陷児滞帯従縦壊懷効勅乘剩転伝鶏溪弘仏為偽楽菓亜惡患徳臓蔵曉焼撃曆歴
 伍莊頭芸墨撰洩糸梟繩專豊価団気織聴覽様騒聞収淨桜覇戯応翻挙弁仮困欠浜円靈鉄圧関総実犧
 予耄貳囟抛遲通肅辺帰豊塩獵贊

注

常用漢字表には 266の簡略字で、下線を付けた字は当用漢字表より増加した 135の簡略字である。

簡略字整理表<2>

1. 日本の簡略字が中国簡体字と同形あるいは基本同形の字（78字）

その中で55字は当用漢字であるが23字は当用漢字以後増加されたものである。

蚤恋湾径茎随墮属囑断参惨辞乱担胆数楼触独励万区欧殴驅枢研寿峽狹狹壯装状寢静淨褻痴灯来尽
 濕叙昼国条虚与翻写旧台号潜届医双余体党当虫宝处麦蚤妒献画礼称声岳譽学会並

近代化過程における日中両国の漢字の改革について

2 中国簡略字と不同形 (188字)

その中76字は当用漢字であるが 112字は当用漢字以後増加したものである。

駢駢圻圻圻圻勸觀權滿兩齒齡癆惱腦隱穩棧殘淺踐錢蚩榮勞齊濟劑齋壳統誦広拈鉞淹竜欄黒
黙墨層僧贈增憎侮海悔梅繁敏侮單禪彈戰敵巢獸俟劍陰檢驗喝渴渴掲壤嬢讓釀醉醉雜稻兎為
偽樂菓滯帶從縱壞懷効勅乘剩軫伝鷄溪弘仏亜惡恵穂藏藏曉焼將受忒擊曆歷伍宗莊頭芸墨攝洩県
繩專疊価団氣織聰覽樣騷鬨収桜霸戲挙弁仮困欠浜円靈鉄圧関総実犧予壱式囹抛遲通肅辺帰豊塩
 獬賛糸対覚絵髓変経輕驅併塀瓶鑄庁点窃継証

注

下線を付けた字は当用漢字表より増加した簡略字である。

簡略字整理表< 3 >

1 既に存在した書きやすい字を利用して出来た簡略字 (232字)

a 『康熙字典』と『宋元以来俗字譜』にある古字俗字あるいはこれによる推し広げる簡略字
(179字)

勸飲觀權蛭恋变湾径莖經輕齊濟剂齋覺学棧殘淺踐錢弘佻繼断齒齡濕頸屬囁滯帶參慘殄糜辞乱從
縱担胆寿鑄数樓菜渠淹竜随髓墮触独陷旧稻兕勵方収叙会繪隱穰壤讓釀碎雜粹壞壤懷曉燒惠穗
專俟劍險檢驗臟藏峽狹狹壯莊裝獎状将寢謁喝渴褐揭垂惡為偽区欧殴駁枢式褒岳国享辺医鉄関双
靈余体鬪塩点党窃对昼当擊鼎痴灯覧曆虫庁来賛総縄覇戯処抛麦聴遅虚蚕実宝焔炉献画尽礼称
糸声台号豊通肅屈条潜証

注

傍点を付けた71簡略字が中国の字と同形字である。

b 草書体を楷書化したもの或いはこれによる推し広げる簡略字 (53字)

織^レ衣^レ襪^レ鷄^レ溪^レ兩^レ効^レ勅^レ淨^レ靜^レ乘^レ剩^レ研^レ瓶^レ併^レ埤^レ並^レ每^レ海^レ悔^レ梅^レ繁^レ敏^レ悔^レ欄^レ黑^レ層^レ僧^レ贈^レ憎^レ憎^レ單^レ禪^レ彈^レ戰^レ敵^レ巢^レ獸^レ采^レ
營^レ蚩^レ勞^レ惱^レ腦^レ獮^レ櫻^レ舉^レ營^レ

注

傍点を付けた 6簡略字が中国の字と同形字である。

2 旧字を改造して出来た簡略字 (34字)

a 部分的省略

騷團忘予缶压価疊与

b 書きやすい符号的形で置き換えるもの

円図芸気壳続読駅釈沢沢沢広拡鉦転伝壘撰撰撰

c 別意味の字を借りて出来た簡略字

弁仮困欠

参考文献

著書

- 1 斯文会編 『日本漢学年表』 1977年発行
- 2 橋本万太郎、鈴木修次、山田尚勇著『漢学民族の決断』（1987）
- 3 『康熙字典』同文書局原版、中華書局香港分局出版 1958版
- 4 井之口有一著『明治以後の漢学政策』（学術振興会1982）
- 5 劉復、李家瑞共編『宋元以来俗字譜』中国国立中央研究院歴史語言研究所刊1930年
- 6 貝塚茂樹著『中国の歴史』岩波新書534C
- 7 魯迅「門外筆談」『魯迅雜文選』上海人民出版社1973.5
- 8 金田一春彦著『日本語 新版（下）』岩波新書3
- 9 倪海曙著『中国語文の新生』時代書報出版社1949年
- 10 陳耀南著『中国語文通論』香江出版公司1986年
- 11 陳榕甫「漢字の發展から簡体字の応用を論じる」『語文彙編』中国語文学社1950年
- 12 『漢字規範化手冊』漢語大詞典出版社1991年
- 13 島田昌彦著『日本語の再生』桜楓社 1984年 9月初版
- 14 藤堂明保著『漢字の過去と未来』岩波新書（黄版） 205
- 15 三浦康広、鶴田一雄著『漢字の研究』中教出版株式会社1992年
- 16 鈴木修著『漢字再発見』（PHP研究所1983）
- 17 佐藤敬之輔著『漢字』一文字のデザインシリーズ5・6－（丸善1973）
- 18 溝口雄三、富永健一等著『漢字文化圏の歴史と未来』（大修館書店1992）
- 19 倉石武四郎著『漢字の運命』（岩波新書 青版93 1952）
- 20 野村雅昭著『漢字の未来』（筑摩書店1988）
- 21 林大著「漢字の問題」（岩波講座『日本語3』1977）
- 22 松田舒編『五体字鑑』
- 23 林大著「当用漢字字体表の問題」（覆刻文化庁国語シリーズ V I 『漢字』1974）
- 24 劉成著『中外關係史論文集』学風出版社1969年
- 25 平川祐弘著『進歩がまだまだ希望であった頃』講談社学術文庫 910 1990年
- 26 周有光著『漢字改革概論』（文字改革出版社）

論文

- 1 李栄「漢字の演変と漢字の将来」「中国語文」1986年第5期
- 2 藤井明「中国の文字改革」（大東文化大学紀要1979年第17期）
- 3 藤井明「中国の文字改革」－文革後の漢字簡略化について（大東文化大学紀要1979年 第21期
- 4 柴垣芳太郎「中国における漢字簡略化の現状」竜谷大学論集 1964年
- 5 柴田稔「第二次漢字簡略化方案（草案）について」1979年第21期関西大学東西学術研究所紀要（二）
- 6 伊井健一郎「中国の消えた簡化字」1989年
- 7 さねとうけいしゅう「中国文字改革の新段階」－郭沫若の所論を中心にして1958年
- 8 松本昭「中国の漢字整理」1975年
- 9 石山曙生「中国文字改革における漢字の略字化法とその減画状態について」姫路獨協大学外国語学部紀要3 1967年
- 10 石山曙生「中国文字改革の休結」－文字改革1986年以降の動き 湘南短期大学紀要1990年
- 11 「台湾の標準漢字研究簡介」「文字改革」1982. 1
- 12 杜学知「漢字繁簡二体から比較して長所と短所を見る」1986. 1. 19の「星島日報」
- 13 陳謙臣「漢字・漢字改革と漢字文化圏」『竜谷紀要』第12卷（1991年）第2号
- 14 王鳳陽「漢字字形発展の弁証法」『社会科学戦線』1978年第4期